

「丘に立てる荒削りの The Old Rugged Cross」、

「わがゆく道いついかに In some way or other the Lord will provide」

讃美歌からの黙想

Takako Nojiri

はじめに

第 10 回のエッセイで岡本先生の「讃美の力」の集会にあたって、毎回取り上げられる讃美歌についてそれぞれの讃美歌が作られた地理的な、そして歴史的な事柄を調べてエッセイを書く度に、「時間と空間の長い旅をしている気持ちになる」と、書きました。

今回は「岡本先生と共に味わう讃美の力」第 10 回「丘に立てる荒削りの The Old Rugged Cross」、第 11 回「わがゆく道いついかに In some way or other the Lord will provide」から得た黙想をある物語に託して書き記したいと思います。

「第 10 回岡本先生と共に味わう讃美の力」で取り上げられた「丘に立てる荒削りの The Old Rugged Cross」の歌詞の持つ意味は深く根源的な教えなのですが、まるでフォークソングを思わせるような穏やかで親しみやすいメロディーが作られています。イエスの苦しみと犠牲の十字架を歌った讃美歌であるのにもかかわらず、いつまでも口ずさんでいたくなるような、そのメロディーの向こうには、イエスの愛に満ちた優しい清らかな微笑みが浮かびます。

岡本先生による資料 1 に讃美歌「丘に立てる荒削りの」作詞作曲家ジョージ・ベナード (1873~1958)について、その生涯が紹介されていますが、その中にベナードが「自由主義神学との戦い」に苦しんだ、という事が書かれています。

そしてベナードが活躍した 20 世紀前半に全盛期を迎えた自由主義神学についての説明がなされています。その中のキリストの神性を否定し、単なる倫理的・道徳的教師・模範者とし、人間の罪性を軽視し、人間の自由と自律性を強調する、という考え方は 18 世紀のヨーロッパにおける啓蒙主義から発展したキリスト教への批判的な考え方と通じています。

(それは、芸術の世界にも色濃く反映していきました。)

ベナードがその自由主義神学との戦いの苦しみののちに見た美しさとは、戦いの向こうに変わらずにあった神の愛であったのではないかと思います。

また、第 11 回「わが行く道」も「丘に立てる荒削りの」と同じ 3 拍子の曲で、やはり親しみやすく、明るいメロディーの曲です。それでありながら、毅然として歩む信仰者の姿勢が浮かぶ音楽となっています。

岡本先生の資料 1(讃美歌略解による)では作曲者、**フィリップ・フィリップス**(1834~1895)について、「歌う巡礼者」として知られている、との記述があります。自らアコーディオンの車を引いて街角で歌声を響かせた「歌の伝道」はやがてオーストラリアを初め世界に向かっていきました。**作詞者のマーサー・A・クック(1806~1874)**と共に、19 世紀の人です。

上記の 2 回の学びから、私は 19 世紀前半に書かれた一つの歴史的な歌曲集、「冬の旅」(フランツ・シューベルト作曲、ウィルヘルム・ミュラー作詞)を思い浮かべました。

この作品はその内容の深さにおいて、多くの偉大な歌い手、聴衆、研究者を魅了してきました。未だに次々と研究書が出版される程、この歌曲集には大きな魅力と、問題提起があります。まるで、第 10 回と第 11 回の学びを併せ持ったような連作歌曲集、つまり歌物語なのです。

「冬の旅」

今から 200 年ほど前にウィーンに生きた作曲家、シューベルトは名曲「アヴェマリア」「野薔薇」「菩提樹」、「未完成交響曲」などで知られています。

「冬の旅」は、そのフランツ・シューベルトと、作詞家ウィルヘルム・ミュラーが創り上げた青春の苦しみと、奇跡の音楽です。

18 世紀から起こった(特にドイツとアメリカにおいての)啓蒙主義者たちによるキリスト教批判、またはカントなどに代表される理性の強調、奇跡の否定、懐疑、合理主義、それらのもので次第に人々は不安と失望感に陥るようになります。特にドイツの大学では神学者たちが啓蒙主義の大きな影響を受けることになりました。そんな中で、「冬の旅」は書かれました。

「冬の旅」は孤独の中でさまようひとりの若者の独白という形で、詩と音楽が進んでいきます。

24 曲から成る連作歌曲集で、その中には前述の、有名な「菩提樹」「春の夢」など、単独でも歌われる名曲が含まれています。

ある雪の夜、一人の青年が「おやすみ」とつぶやいて、恋人の少女と両親の住む家をそっと出て行く所から物語は始まります。

「冬の旅」にはどこにも、その青年の職業も立場も経歴も年齢も、人種さえも書かれていません。詩から想像できるのは、ある時に街にやって来て、おそらく中流以上の家庭の娘である一人の少女と出会い、相思相愛となり、親達も結婚を許すとさえ思われたほどの仲になった事です。しかしその後少女とその両親は青年を見限って金持ちの有力者との結婚に乗り換えました。そこから、その若者が地位も財産も持っていなかった事が分かります。少女と両親の心変わりに絶望した若者はその街の全てに無言の別れを告げて、当てのない旅に出ました。冬の街や、雪の荒野をさまよい、失恋の悲しみはやがて自己憐憫や、疎外感、世の中に対する憤懣、辱めを受けた怒りへと変わっていきます。

青年は自己憐憫の情にかられながらも、自分の知性や人間性に自信があり、本心では俗世間の人々を下に見ていた事が伺えます。自分が如何に洗練された知性と良心を持つ人間であるか、世間の人々が如何に俗物で、自分がその人々とは違うので受け入れられないのだという事を延々と謳い上げます。

全音楽譜出版社の「シューベルト 冬の旅」の楽譜に載っている大島博氏による対訳から詩の一部を引用します。(各詩の表題は松本隆氏による)省略部分は……で表示しています。

第1曲 「おやすみ」

よそものとして来た私は、
よそ者としてまたここを去る

...

今、世界は色褪せて
道は雪に埋もれている。

...

私の旅立ちに
時など選んではいられない
行くべき道を決めねばならぬ

...

ここに留まるいわれがあらうか、
人が私を追い払うのに？

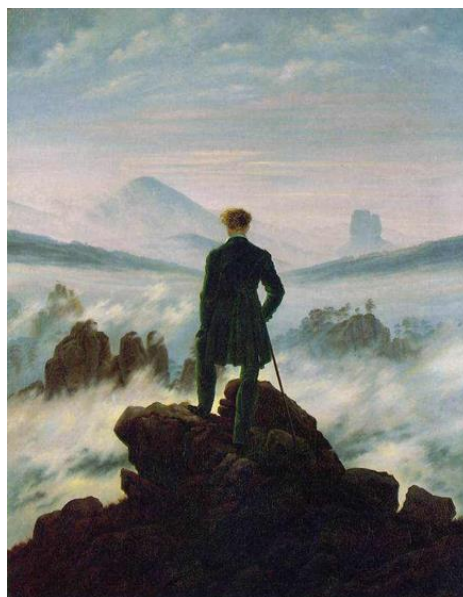
...

凍てついた冬の世界を当所なく旅を続ける若者は、自分がはじき出された富や権力に対する嫌悪感と、それに反比例するような自分の自負心との葛藤に苦しみます。ロマンティックな失恋の旅に思える「冬の旅」は凄まじい内面の葛藤と虚無感に満ちた内容に変化していきます。

自分を裏切った少女への未練と自分を葬り去ろうとした両親、街の人々への恨み…自分は悪くない、自分はこんなに愛していた、自分はこんなに優れた人間なのに、「何故?」「何故?」「何故?」

と、自問しながら青年は歩きます。

当所なく歩く主人公の心情を表した詩には、様々な情景が描かれています。ある時は凍った川、ある時は菩提



樹の木、ある時は平凡な村、水の枯れた谷川・・・青年の心は疑問と少女への失望、自分を追いやった人々に対する恨みの感情に捕らわれたままです。青年は現代の言葉で言う「自分探し」の旅を続けていくのです。

24 篇の詩から成る物語の後半になると、もはや失恋の相手である少女さえ登場しなくなります。そしてひとつひとつの詩は短くても、一人称で書かれた青年の独白は、第 19 曲に至るまでこれでもかというくらいに他者への失望と、惨めな気持ち、それと表裏一体の自己肯定を表しています。特筆すべきはその中には明らかに聖書を思わせる文章があり、ミユラーが信仰と自分の信じる理性との葛藤を抱いていた事が推察されます。(赤字で表示)

第4 曲 「凍結」

雪の中でいたずらに
私はあの娘の足跡を探している
彼女が歩いた跡を
.....
花はどこだ
緑の草はどこだ
花は枯れはて
芝生も、もはや色褪せた
.....
私の心は死んだも同然だ
.....

第5 曲 「菩提樹」

市門の前の泉のほとりに
一本の菩提樹が立っている。
.....
すると枝々がざわめいた
まるで私に呼びかけるように。
「さあ、ここにおいで、友よ、
ここにお前の安らぎがあるのだよ！」
.....
私は、今やずいぶんと
あの場所から遠ざかってしまったが、
枝のざわめきはなおも絶え間なく聞こえるのだ、
「おまえの安らぎはここにあるのに！」と。

第11 曲 「春の夢」

夢に見た、色とりどりの花々を。
咲き薫る五月の花のようだった。
・・・すると雄鶏が時を告げ、
私の目が覚めた。

第12 曲 「孤独」

・・・私は私の道をたどってゆく、
・・・孤独に、人と挨拶を交わすこともなく。
・・・嵐が猛り狂っていた時には、
まだこんなにも惨めではなかったのだ。

第17 曲 「村にて」

犬どもが吠え、その鎖が音を立てている。
人々は床の中で眠り、
自分の持っていない様々のものを夢見て、
良きにつけ悪しきにつけ疲れをいやす。
.....
吠えて私を追い払え、見張り役の犬どもよ、
.....どんな夢も、もう私には終わってしまった。
.....眠っている人々の間で、ぐずぐずしているいわれがあろうか？

第19 曲 「まぼろし」

一つの光が私の目の前を親し気に舞い進む。
.....ああ、私のように惨めな者は、
目も綾なそのたくらみに、進んで身をゆだねるのだ。
.....ただ惑わしだけが、私の得たものなのだ！

ミュラーが描いた凍てつく冬の光景、それは青年の心の中の荒涼とした風景でもあるのですが、シューベルトは、第5 曲の「菩提樹」、第11 曲の「春の夢」の他はミュラーの詩に寄り添うように、ある時は寒々しい、ある時は感傷的な、そしてある時は殺伐とした、と言ってもいい音楽を作曲しています。

しかし、第20 曲「道しるべ」から、シューベルトの音楽はミュラーの詩に対して何かを示唆するような音楽にはっきりと変わっていきます。

第20 曲 「道しるべ」

いったい私はなぜ、

他の旅人たちの通る道を避けて、
雪に覆われた岩山を抜ける
隠れた道を探すのだろう。

.....

一つの道しるべが立っているのを私は見る。
目の前に揺るぎなく。
一筋の道を私は行かなければならない。
まだ誰も戻って来たことがない道を。

「冬の旅」には「私—青年」である主人公と共にもう一人の隠れた主人公がいます。それは常に主人公と共にある「道」です。主人公はやっとここで、「道」の存在を自覚します。そしてこの詩にシューベルトは執拗なまでに「歩みのリズム」と言われる 8 分音符を刻んだリズムで作曲します。時々道に迷うような不自然な動き方もしますが、ピアノが徹底的に歌に寄り添います。「歩んでいかなく
てはならない」というように。そしてこの「道しるべ」こそが、十字架であると私には思われます。

第21 曲「宿屋」—墓地」

「道しるべ」の後に来る詩が墓地を意味する「宿屋」である事は、ミュラーの深い苦悩とアイロニーであると思われます。

その道は、とある墓場へと私を
導いた。
ここに泊まる事にしよう、と
私はひとり考えた

.....

おお、無慈悲な宿よ、
やはり私を拒むのか？
それなら、ただ先へ先へと旅を続けよう

.....



ミュラーの詩が、道を自覚しても尚素直にその道を歩けずにいるのに対して、シューベルトの音楽の中には、隠された「アーメン」の和声進行が、何と 17 回も現れます。また、そしてその冒頭の前奏に使われている装飾音は十字架音型(十字架の形をした音の塊)です。

第22 曲 「勇氣」

勇ましい歌です。雪や風に逆らってやろう、と半ば確信犯的な空元気(からげんき)を詠った詩です。

.....

心のいう事は聞くまい、
聞く耳など持たないぞ。
心が嘆くことなぞ気にすまい。

.....風と雨に逆らって。

どの神も、この世にいるつもりがないというのなら

我ら自身が神となるのだ

のちの世代のニーチェを思わせるような崩壊(「神は死んだ」という)に向かっていくような詩です。この詩はこの時代の、或はもう少し先の未来に待っている不信仰と退廃と不安の時代を先取りしているような詩に思えます。

この詩を擲揄するように、シューベルトは太鼓やトランペットを思わせる大げさで、騒々しい音楽を作ります。猛々しく、アドレナリンに満ちたような詩、その最後の歌詞は「**神が君臨しないつもりなら、俺たち一人一人が神となるのだ！**」という挑戦的なものです。そしてシューベルトはその詩に滑稽とも思われる旋律をつけ、その詩の傲慢をからかうようにトランペットのファンファーレを模した短いピアノの2小節を加えます。

ミュラーの詩の中の荒れ狂う青年をまるで手の中で踊るピエロのように変えてしまったのです。

第23 曲 「幻日」

私は空にある3つの太陽を見ていた。
それらもまた、そこにとどまっていた。
私から離れたくないと言いたげに。
ああ、お前たちは私の太陽ではない
.....
ああ、ついこの間まで、私にも3つの
太陽があった。
今は良い方の二つが沈んでしまった、
3つ目の太陽も沈んでしまったら
闇の中で、私はもっと心地よくなるだろう

ここに出てくる「3つの太陽」は何を表しているのかは謎で、読者の解釈に委ねられています。キリスト教世界においての「三位一体」という説もあれ



ば、フランス革命の思想、「自由、平等、博愛」という説もあります。

その解釈はさておきシューベルトの音楽は、創造世界と同化するように静かで、壮大で高貴にさえ聞こえます。巨大な「3つの太陽」という暗示的な対象物への深い絶望と憧れと皮肉をまとった形で表わしているミュラーの詩に対して、シューベルトが与えたのは平安に満ちた美しいコラール(讚美歌)の響き、祈りの音なのです。そして「アーメン」の和声進行が9回あらわれます。

私にはこの曲が「冬の旅」の主人公が辿り着いた葛藤の果ての安息、祈り、そして魂の解放であると思います。道しるべが示された後も尚、抗ってぼろぼろになった主人公を、シューベルトはその音楽で優しく包むように再生させました。シューベルトの面目躍如の曲であると言えるでしょう。そして次の終曲において、この歌物語で初めて青年以外の人物が登場します。

第24曲 「辻音楽師」

向こう側村はずれに
ライアー廻しが立っている
そして凍えた手で
懸命にライアーを回している

.....

それでもライアーを廻し続けて
その音が絶えることはない

不思議な老人よ
あなたと一緒にいくべきなのか

.....

再生した青年が出会ったのは一体誰なのでしょう。出会ったばかりの青年が、「あなたと一緒にいくべきなのか」と問いかけたのは・・？

前述のようにおそらく主人公の青年は、自分の知性や、教養や能力に自信があって、世の人々を見下していたようなところがありました。自分に欠けているのは、社会的な権力や富であって自分の今の状態は、他者からの迫害によるものだと思えて止みませんでした。

その青年にとって、村の外で出会ったその老人は世間の人々よりも更に見下すべき立場にいました。村人や子供に馬鹿にされる一見哀れにも見える一途な音楽師に青年は惹きつけられ、縋ります。そして、初めて他者に対して「一緒にいくべきなのか」という思いを持ちます。

この最後の詩に至ってもミュラーは青年が誰であるか、明らかにしていません。そして、青年の運命を変えた、この「辻音楽師」の正体についても書かれていません。一説では巡礼であるとも、聖人であるとも、姿を変えたイエスであるとも言われています。

なおこの曲の主題は十字架音型なのです。

その素朴さ故に高貴に思えるその人との出会いによって青年がこれからそれまでとは全く別の人生を歩くことになるのは、確かなことであると思われます。

ウィルヘルム・ミュラーとフランツ・シューベルト

前に少し触れたように「冬の旅」の詩を書いたのは 1794 年にドイツのザクセン公国デッサウに生まれ、1827 年に世を去ったウィルヘルム・ミュラーです。

当時のザクセン公国は啓蒙君主フランツの下で「汎愛派」と呼ばれる人々によって教育が成されます。その中心にいたバゼドー(1724~1790)の孫娘とミュラーは後に結婚します。

また、ミュラーの生家の同じ通りに神学者で啓蒙思想家であるモーゼス・メンデルスゾーン(1729~1786)が住んでいました。モーゼスは作曲家、メンデルスゾーンの叔父にあたります。若い時にベルリン大学でカントと論争して勝ったことがあるという優れた知識人でした。父親の代にはミュラー家とも親交がありました。

こうした環境の下で育ったミュラーは、やがてドレスデンの大学に進みます。当時のドイツの大学は啓蒙主義に影響され、ミュラーも入学した大学もその影響下にありました。ミュラーは進歩的なグループに属する友人達に囲まれて、詩作に励んでいました。

そして、義勇軍としてギリシアに従軍した後は生まれ故郷のデッサウに戻り、図書館長、宮廷顧問官など公職を歴任し、地位を得て公私ともに安定して恵まれた生活を送りました。そのような社会的には光が当たった実生活にも拘らず、「冬の旅」のような孤独な魂の放浪、叫びを詩に詠ったのは、常に満たされる事のない内面があったからなのではないかと思われます。1827 年、36 歳の時に心臓発作で死去します。

一方、フランツ・シューベルトは 1797 年、ウィーンの郊外に生まれました。厳格だった父親は教師、家は父親が経営する小学校と一体となった建物です。

早くから音楽の才能を現したシューベルトは、後の世に、モーツァルトを毒殺したのではないかと言われたアントニオ・サリエリに認められて宮廷の教会の寄宿学校で学ぶこととなります。後のウィーン少年合唱団の前身でもあるその寄宿学校で音楽の英才教育を受け、その後父親の学校で教員として働くことになりましたが、長くは続かず寄宿学校時代の友人達の家で居候をする事になります。生活費も稼げず作曲に明け暮れているシューベルトを、友人達は暖かく庇護し、応援します。シューベルトは「キノコ」という渾名で呼ばれていたように、身体が小さくひ弱で、眼鏡に頼らずにはいられない程目が悪く、内気な性格でし



た。生涯に渡って経済的に困窮し、家庭を持つ事もできませんでしたが、不思議な魅力で仲間達に愛され、支援され続けました。

シューベルトはミュラーに遅れること約 1 年後の 1828 年 11 月、ウィーンの下町の貧しい屋根裏部屋で病のため息をひきとります。わずか 31 年の生涯でした。

シューベルトとミュラーは生涯実際に会う事はありませんでしたが、2 人は少年期に似通った体験をしています。

二人ともに教養ある家庭ではあったものの、社会的な身分は決して高くはなく、同じく十代で母親を亡くし、父親が間もなく若い女性と再婚するという経験です。しかし後の人生においては、安定した社会的地位を持つに至ったミュラーと、貧しく市井の中でひたすらに音楽を生み出していったシューベルトの人生は真逆のように思えます。

しかし、人間の理性に重きを置きながら神を求めるミュラーの心の叫びである詩集に出会った時、シューベルトは真摯に音楽で答え、病の中で全力で作曲をし、その完成の後、力尽きたように出版を待たずにその人生を終えました。

第 10 回、第 11 回の「讃美の力」から得た黙想です。

参考文献 「ウィルヘルム・ミュラーの生涯」 渡辺美奈子(東北大学出版会)
「シューベルトの冬の旅」 イアン・ボストリッジ(ARTES)
「自由主義神学」 新キリスト教辞典より
「キリスト教神学入門」 A.E.マクグラス(教文館)
「シューベルト」 アルフレート・アインシュタイン(白水社)
「シューベルトの音楽をたどって」 ディートリヒ・フィッシャー・ディスカウ(白水社)

尚、岡本雅幸、青木義紀、鎌野善三各牧師先生方に、ご教示、ご協力をいただきました事を感謝いたします。

文中に使用した絵画はカスパー・ダヴィッド・フリードリヒ(1774~1840)のものです。詩人のミュラーと作曲家のシューベルトと同時代に活躍した画家です。